

神遊び

「神様のいない村

昔、山あいに小さな村があった。

山があり、川があり、その間に田畑が広がっている、ごく普通の村だった。村の中央には古い神社があり、鳥居も、拝殿も、本殿も揃っていたが、その神社には肝心の神様がいなかった。

本殿の中は空っぽだった。

御神体もなければ、神様の名前もない。何を祀るために建てられた神社なのか、もう誰も知らなかった。

けれど村人たちは、そのことを特別不思議には思っていなかった。自分たちが生まれるよりずっと前から、その神社はそういうものだったからだ。

ただ、神社を守っていた老人だけは、ときどき遊びに来る子供たちに、

「空っぽのものには、何も入れちゃいかんよ」

と言った。

子供たちが、どういう意味なのか尋ねても、老人は笑うばかりで、それ以上は教えてくれなかった。

2「神様はい

村には七人ほどの子供たちがいて、その中にシノという少女がいた。

シノは、この村が少し退屈だった。

隣の村には大きな祭りがある。山向こうの村には有名な水神様がいて、年に一度、その神様を見に遠くから人がやって来る。

なのに、自分たちの村には何もない。

神社だけはあるのに、神様すらない。

ある日、シノは空っぽの本殿を覗きながら言った。

「だったら、作ればいいじゃん」

神様を。

子供たちは笑った。

誰かが、

「神様には目がある」

と言ったので、シノは一人の子供を指差した。

「じゃあ、あんたが目」

すると別の子供が、

「耳もある」

と言った。

「口もいる」

「手もいるよ」

「声も」

「名前もいるんじゃない？」

そうやって、子供たちは神様の身体を一つずつ考えていった。

一人を神様にするのはなかった。

一人が目になり、一人が耳になり、一人が声になり、一人が手になる。

誰一人として神様ではない。

けれど全員が揃えば、神様になる。

それが、子供たちの新しい遊びになった。

3―最後のひとつ

神様ごっこを繰り返しているうちに、子供たちは勝手に遊びのルールを増やしていった。まず輪になる。

誰かを見る。

誰かを選ぶ。

名前をつける。

誰かの声を真似する。

誰かが動いたら、その動きに続く。

みんなで同じ言葉を言う。

最初は、その日の気分で毎回違う遊び方をしていたが、何度も繰り返すうちに、それらは少しずつ「神様を作るために必要なこと」になっていった。

そしてある日、シノが一つだけ妙なことを言った。

「最後だけは、決めちゃだめ」

みんなは意味が分からなかった。

シノ自身も、なぜそんなことを言ったのか分からなかった。ただ、そうしなければいけないような気がした。

神様を作る最後の一つだけは、誰にも命令されず、誰にも教えられず、誰かが勝手に始めなければならぬ。

誰かが何かをする。

それを見た別の誰かが、なんとなく続く。

さらに別の誰かが、それに続く。

そうして、最初に誰が始めたのか分からなくなったとき、子供たちは声を揃えて言った。

「神様が動いた」

4―いなくなった子

ある夏の日、子供たちの一人であるユウがいなくなった。
六歳だった。

昼過ぎまでみんなと一緒に遊んでいたのに、夕方になっても家へ戻ってこなかった。
大人たちは山へ入り、川沿いを探し、古い井戸の中まで覗いた。それでも夜になってもユウは見つからず、母親は家の前で泣いていた。

そこで子供たちは、神様ごっこをすることにした。
本気で神様を信じていたわけではない。

ただ、ほかに自分たちにできることがなかった。
いつものように輪になり、ユウの名前を呼んだ。

誰かが山を見た。

別の誰かが、その方向を指差した。

しばらく待ったが、何も起こらなかった。

やっぱりただの遊びだった。

みんながそう思い始めたとき、一人の少年が立ち上がった。

カイだった。

誰にも言われていなかった。

カイ自身も、なぜ立ったのか分からなかった。

ただ山を見たまま、

「こっちだと思う」

と言って歩き始めた。

シノがその後を追い、もう一人が続いた。

気がつけば、子供たちは全員カイの後ろを歩いていた。

誰も普段使わない獣道から山へ入り、しばらく進んだ先にある古い炭焼き小屋のそばで、泣いているユウを見つけた。

5 | 奇跡

ユウには大した怪我もなかった。

どうしてそんな場所まで一人で行ったのか、大人たちが何度聞いても、ユウはうまく説明できなかった。

ただ一つだけ、

「呼ばれたから」

と言った。

誰に呼ばれたのか尋ねても、ユウには分からなかった。

「みんなの声みたいだった」

それだけだった。

この話はすぐに村中へ広がった。

子供たちは、ただの偶然だと思っていた。

カイがたまたまその道を知っていたのかもしれないし、ユウが見つかったことと神様ごっこには、何の関係もないのかもしれない。

けれど大人たちは、子供たちほど簡単には笑わなかった。

その年、村では長い間、雨が降っていなかったからだ。

の―大人たちの神様ごっこ

最初に言い出したのは村長だった。

「もう一度、あれをやってみてくれんか」

雨乞いだった。

シノは嫌がった。

あれは神様を呼ぶための儀式ではなく、自分たちが勝手に作った遊びだと言った。

村長は笑った。

「だったら遊べばいい」

子供たちは神社に集められ、その周りを大人たちが囲んだ。

いつものように輪になった。

誰かを見る。

声を真似する。

名前を呼ぶ。

同じ言葉を言う。

けれど、何も起こらなかった。

大人たちが少しずつ失望し始めた頃、カイが突然、空を見上げた。

誰にも言われていなかった。

つられてシノも空を見た。

次の子供も、その次の子供も空を見る。

最後には、周囲にいた大人たちまで全員同じ空を見上げていた。

その夜、雨が降った。

ほんの短い夕立だった。

けれど、長く雨を待っていた村人たちには、それで充分だった。

神様が雨を降らせた。

そういうことになった。

七―願ごっこ

それから、神様ごっこは遊びではなくなった。

病気になった者がいれば、神様を作った。

作物が育たなければ、神様を作った。

失くし物があれば、神様を作った。
嫁が来なければ。

子供ができなければ。

商売がうまくいかなければ。

困ったことが起こるたび、村人たちは神様を作るようになった。

もちろん、何も起こらないこともあった。

どれだけ願っても病気が治らないこともあれば、雨が降らないこともあった。

それでも、ときどき偶然のように願いが叶った。

そして人間は、うまくいかなかったことよりも、うまくいったことをよく覚えていた。
いつしか子供たちは必要とされなくなった。

大人たち自身が、神様の作り方を覚えてしまったからだ。

8—シノの母

ある冬、村の共同の蔵から米がなくなった。

何俵かが、忽然と消えていた。

犯人は分からなかった。

けれど疑われたのは、シノの母親だった。

夫を亡くしてから、シノと二人で暮らしていた。

家は貧しかった。

それだけが理由だった。

証拠はなかった。

シノは怒った。

母親も、米など盗んでいないと言った。

けれど村人たちは、

「神様に聞けばいい」

と言った。

神様なら、本当のことを知っている。

神様が母親の無実を示してくれば、それで全員が安心できる。

そういうことになった。

神社に人が集まり、シノの母親だけが輪の真ん中へ座らされた。

シノは、その輪には加わらなかった。

9—嫌なら、やめてもいい

神遊びが始まった。

最初に村長が言った。

「怖がらなくていい。これはお前を責めるためにやるんじゃない。むしろ逆だ。疑いを晴ら

すためだ」

村人たちも頷いた。

誰も怒ってはいなかった。

誰も母親を罵らなかった。

「盗んでいないなら、神様がちゃんと分かってくださる」

「そうすれば、もう誰も疑わなくて済む」

「シノだって安心するだろう」

母親は、

「私は盗っていません」

と言った。

誰かが優しく、

「分かっているよ。だから、それを神様にも分かってもらおう」

と答えた。

輪の中で、一人が母親を見た。

それにつられて、もう一人が母親を見る。

一人。

また一人。

やがて、村人たち全員が母親を見つめていた。

母親は俯いた。

「顔を上げて」

誰かが言った。

母親は顔を上げた。

「名前を言って」

母親は自分の名前を言った。

「もう一度」

もう一度、名前を言った。

「盗んでいません、と言って」

母親は言った。

「私は盗んでいません」

誰かが、

「もう一度」

と言った。

「私は盗んでいません」

もう一度。

「私は盗んでいません」

さらに、もう一度。

「私は盗んでいません」

何度目かで、母親の声が震えた。

そこで一人の女が、

「大丈夫？」

と声をかけた。

「無理しなくてもいいんだよ」

別の人間も言った。

「嫌だったら、やめてもいい」

母親は周囲を見た。

輪になって座る村人たちの向こうには、シノがいた。

しばらく黙ったあと、母親は、

「続けます」

と言った。

村人たちは、安心したように頷いた。

10ー自分で選んだこと

神遊びは続いた。

そもそも、何をすれば母親の疑いが晴れるのか、誰にも分かっていなかった。

だから村人たちは、なんとなく続けた。

母親を立たせた。

また座らせた。

名前を呼んだ。

同じ質問を何度もした。

誰かが母親の手を取ると、その手はひどく冷たかった。

「少し休む？」

母親は首を振った。

「大丈夫です」

本当はもう、大丈夫ではなかった。

それでも、やめるとは言わなかった。

ここでやめれば、疑われたままになる。

ここでやめれば、シノまで泥棒の娘になる。

ここでやめれば、やっぱり自分が盗んだのだと、みんなが思う。

だから母親は、続けると言った。

村人たちは何度も確認した。

「本当に大丈夫？」

「まだやる？」

「もう終わりにしてもいいんだよ」

そのたびに、母親は自分の口で答えた。
続けます。

まだできます。

大丈夫です。

村人たちは、その言葉を尊重した。

無理強いしてはいけないと思ったからだ。

本人がやると言っているのだから、止める方が失礼なのかもしれない。

疑いを晴らしたいという本人の意思を、きちんと大切にしなければならない。

そうして、夜になった。

夜が深くなった。

何度も、

「もうやめる？」

と聞かれた。

何度も、

「続けます」

と答えた。

途中、母親は一度倒れた。

村人たちは慌てて駆け寄り、水を飲ませ、身体をさすった。

「今日はもう終わろう」

村長が言った。

母親は、しばらく動かなかった。

それから、輪の外にいるシノを見た。

「続けます」

と言った。

誰も、それ以上止めなかった。

本人が決めたことだった。

夜明け前、母親はもう一度倒れた。

今度は、起きなかった。

二一立派なお母さん

朝になって、村人たちは泣いた。

本当に泣いた。

誰一人として、こんなことになるとは思っていなかった。

「かわいそうに」

「無理をしすぎたんだ」

「途中でやめればよかったのに」

「どうして、あんなに頑張ったんだ」

みんな、心から母親の死を悲しんだ。

けれど、誰も自分たちが母親を殺したとは思っていなかった。
何度も聞いたのだ。

やめるか、と。

休むか、と。

そのたびに母親自身が、続けると言った。

誰も強制していない。

誰も脅していない。

だから、これは誰かがやったことではなかった。

そうして母親の身体を運び出そうとしていたとき、一人の男が息を切らして走ってきた。
共同の蔵から消えた米が見つかったのだという。

床板の一部が腐って落ち、その下へ何俵かが滑り込んでいた。

米は盗まれてなどいなかった。

最初から、誰も盗んでいなかった。

しばらく、誰も何も言わなかった。

シノは、死んでいる母親を見た。

それから、村人たちを見た。

誰もシノを見なかった。

やがて村長が言った。

「神様が、証明してください」

シノには、意味が分からなかった。

「お母さんは無実だったんだ」

誰かが泣きながら言った。

「よかったな、シノ」

別の女がシノを抱きしめようとした。

シノは逃げた。

「違う」

と言った。

「何が違うんだ」

「母さんは、最初から盗ってないって言ってた」

「分かってる」

「じゃあ、なんで死んだの」

誰も答えなかった。

しばらくして、一人の老人が言った。

「お母さんが頑張ったから、神様が教えてくださったんだよ」

「違う」

「お母さんは立派だった」

「違う」

「村のために最後まで耐えたんだ」

「違う！」

村長はシノに向かって、とても優しい声で言った。

「シノ。お母さんのことを誇りに思いなさい」

シノは母親の身体を見た。

そして、泣いている村人たちを見た。

みんな、本当に悲しそうだった。

本当に母親を惜しんでいた。

本当に、自分たちは悪くないと思っていた。

そのことがシノには、母親が死んだことよりも、ずっと怖かった。

だからシノは言った。

「神様なんていない」

村人たちは、泣くのをやめた。

「神様なんて、最初からいない」

「全部、自分たちでやったんだよ」

「母さんを殺したのも神様じゃない」

「みんなだよ」

その時初めて、

村人たちは全員、

シノを見た。

12―神遊び

それから、儀式をしていないときにも同じようなことが起こるようになった。

市場で誰かが立ち止まる。

それを見た何人かも立ち止まり、やがて全員が同じ店を見る。

翌日、その店の主人が村を追い出される。

葬式で誰かが笑う。

一人がつけられて笑い、もう一人が笑い、最後には全員が笑っている。

ある家が燃えたときも、誰も「火をつけろ」とは言わなかった。

誰かが薪を運んだ。

誰かが油を持ってきた。

誰かが火を持っていた。

誰かが扉を閉めた。

それぞれが自分のしたことを説明できた。

誰一人として、家を燃やそうとは言っていなかった。
けれど、家は燃えた。

村人たちは、そうした出来事を、

「神遊び」

と呼ぶようになった。

神様がお遊びになっている。

だから仕方がない。

誰も悪くない。

13―便利な神様

神様は、とても便利だった。

自分が本当はやりたかったことを、神様のせいにできた。

嫌いな人間を村から追い出しても。

誰かを傷つけても。

見て見ぬふりをして。

自分はただ、誰かに続いただけと言えればいい。

自分が最初に決めたことではないのなら、それは自分の責任ではない。

そうして村人たちは次第に、神様が本当にいるのかどうかさえ、気にしなくなった。

神様がいる方が便利だった。

14―カイ

最初に「神様が動いた」人間として、カイは村で特別扱いされるようになった。

神様の声を聞ける。

神様に一番近い。

村人たちはそう言った。

けれど、カイには何も聞こえていなかった。

むしろ、カイ自身が誰よりも神様を怖がっていた。

「俺は、本当に自分で立ったのかな」

ある夜、カイはシノに言った。

「最近、自分が何かしようと思うたびに、それが俺の考えなのか分からないんだ」

シノは、

「だったら、何もしなきゃいい」

と言った。

カイはしばらく黙ったあと、首を振った。

「何もしないって決めたのは、誰だ？」
その数日後、カイは神社で首を吊って死んでいた。
遺書はなかった。
ただ、足元には一枚の紙が落ちていた。
何も書かれていない、
真っ白な紙だった。

15―神様を殺す

シノは神社を燃やそうとした。
神様を殺すためではない。
神様ごっこから始まった、この遊びそのものを終わらせるためだった。
鳥居を倒した。
祭具を壊した。
神社を守っていた老人は、シノを止めなかった。
ただ、
「だから、空っぽのままにしておけと言ったんだ」
と言った。
シノは初めて老人に尋ねた。
「知ってたの？」
老人は答えた。
「神様がいるんじゃない」
そして、空っぽになった本殿を見ながら続けた。
「人間は、空いているところを見ると、何かを入れたがる」
神社が空っぽだったのには、理由があった。
何も祀らないための神社だった。
何かを置いてはいけない場所だった。

16―それでも消えない

神社は焼けた。
鳥居もなくなった。
神様につけられていた名前も捨てられた。
それでも、神遊びは終わらなかった。
なぜなら神様は、もう神社の中にはいなかったからだ。
誰かを見る目。
誰かを呼ぶ声。
誰かに続く身体。

誰かを選ぶ指。

神様の身体は、人と人との間に細かく分けられていた。

一人では神様を作ることにはできない。

けれど、

人が二人いれば、

もう始めることができる。

17―忘れる

村人たちは最後に、一つだけ方法を選んだ。

遊び方を忘れることだった。

誰にも教えない。

書き残さない。

神様について話さない。

村を出る。

そうして長い時間が過ぎ、やがて村そのものがなくなった。

神社があった場所も分からなくなった。

神様の名前も失われた。

シノがその後どこへ行き、どうなったのかも、分からない。

18―残ったもの

ただ、一つだけ記録が残った。

誰が書いたものなのかは分からない。

シノだったのか。

カイだったのか。

神社を守っていた老人だったのか。

あるいは、

誰でもなかったのか。

そこには、

神様のつくりかたが書かれていた。

人を集めます。

輪になります。

誰かを見ます。

誰かを選びます。

名前を与えます。

声を聞きます。

誰かの真似をします。

誰かが始めたことに続きます。
けれど、

最後の一つだけは、
書くことができません。

書いてしまえば、
あなたはそれを、

書かれていたから行うことになる。
最後の一つは、

あなた自身が、
自分で思いつかなければならない。

19ー現在

あなたたちは、
今日、

人を集めました。
あなたたちは、

輪になりました。
誰かを見ました。

誰かを選びました。
誰かの声を聞きました。

名前をつけました。
誰かの真似をしました。

誰かの行動に反応しました。
知らなかったからといって、

やっていないことにはなりません。
これは、

ずっと昔に村人たちがやったことと、
同じです。

20ー白紙

けれど、
まだ足りません。

神様を作る、
最後のもの。

それだけは、
カードには書けません。

命令された行動では、
神様は動けないからです。

誰かが、
自分の意思で始めなくてははいけません。

誰かがそれを見る。
誰かが反応する。
誰かが続く。

そして、
誰が始めたのか、
分からなくなる。

その時、
神様は初めて、
自分の身体を持ちます。

誰か、
もう始めましたか。
誰かが今、

誰にも言われていないことを、
しましたか。
それは本当に、

あなたが思いついたことですか。
何もしなかった人。
あなたは、

何もしないことを、
自分で決めましたか。

21―神様のつくりかた

神様は、
命令しません。

神様は、
喋りません。

神様には、
自分の身体がないからです。
だから、

人の身体を使います。
人の声を使います。
人の目を使います。

そして、

人が、

自分で決めたと思っていることを使います。

そうして、

一人では存在できないものが、

人と人との間に生まれます。

誰のものでもなく、

誰の責任でもなく、

けれど、

確かにそこにあるもの。

昔の人たちは、

それを、

神様と呼びました。

だから。

神様はもう、

できています。